



まうぢやなくても

田口武 句集

つねづね俳句に「文体」なるものを持ち込む
ことが出来るか、という自問はあった。その
問いに迅速く答えを呉れたのが、この田口武
その人。隣り言葉がそのまま一句を成すと
いう例は以前にもあったが彼は更に意識的に
経路的に書く。一読、読者は気が付けばしん
なりとした「田口文体」なるものに觸れ挿ら
れている。韻文精神に背を向けているかと思
えは伝統的骨格もチラと見せる。何ても
自己規制の上で遊んでいるのだという。
「見究竟の漢に見えていて、この少年のよう
なナイーブな作品の数々。そして微量の毒。
このアンバランスが長く停滞気味の、俳壇への
起爆剤にならないかと思っている。

中原 道夫

考へが少しひまはりとは違ふ

木屑がにほふと密会のやうだ

木枯に喧嘩売られてゐる如し

白鳥の薄情さうな白さなり

白鳥の餌に媚葉が混ぜてある

板塀の裾濡れてゐる鳥総松

ともだちのひとりと牡丹雪のこと

民宿に離れが二棟 諸葛菜

サフランに近づいてやらねばならぬ

日の当たる縁側で読む年賀状

白鳥の曳かるるやうに流れ行く

観
光
課
季
節
職
員
小
白
鳥

大牡丹風に噛みつくところなり

居留守つかふに風鈴の鳴り過ぎし

海
想
ひ
山
想
ひ
年
賀
状
書
く

牛
小
屋
の
バ
ケ
ツ
の
中
の
初
氷

病人に初雪を言ふ見たがらず

白鳥に裏表あり裏の見ゆ

白鳥の一花の蒼し離れ浮く

間違ひを起こさぬやうに目張剥ぐ

堰切つて来る君でなく春ではなく

空瓶は口をとがらせ花吹雪

酒臭き末期の吐息捨案山子

大根を美しくなるまで洗ふ

岸に寝る白鳥
空気抜いてあり

ぶらんこを揺らして
少し泣いてゐる

大
枝
垂
桜
仰
ぎ
ぬ
御
歴
々

空
蝉
が
柱
に
ふ
た
つ
外
廁

このあひだむしつた場所の草むしる

朱鷺を見てをるに夏鶯の声

西瓜割おほきな波の音の来る

サッカー部ソフトテニス部コスモス部

ふかしいも意外な過去を聞かさるる

うすひらにみづになりゆく鳥のこゑ

煙突が見えてゐるので春愁ひ

麦抜きのおさ中銀行員が来る

野良着から紐垂れてゐる瓜の花

老いてゆくまめに金魚の水替へて

句集 さうちやなくても
2005年7月7日 発行
著 者 田口 武
発行人 田口 武
装 幀 中原 道夫